



笹小だより 12月号



感謝の気持ち

校長 佐々木 和美

笹野台のまちは、秋から冬の装いへと変化しつつあります。木々から落ちた黄や赤、茶などの葉が色鮮やかな絵の具を街路に落としたかのように見えます。反対に少しずつ葉を落とす枝が寂しくも感じられます。日毎に寒くなるこの季節、子どもたちの体調が一層気になります。

早いもので師走となります。ポストコロナである令和5年は、学校における行事等がコロナ前に戻ったものもあれば、時代の流れや子どもたちの現状を見つめ、新たに形を変えて行った活動もありました。笹野台地域行事にもいくつか参加させていただきましたが、以前とは違った形で取り組んでいるものもあるとのことでした。形は変化しても、人と人との繋がり大切さを実感することができました。

笹野台小学校に校長として着任し8カ月が経ちましたが、「笹野台の子どもたちは地域に守られている」と感じます。地域の方々、関係機関の方々には、社会科や総合的な学習の時間、防災教育等の学習活動へのご協力だけでなく、登下校における見守りやパトロール等子どもたちの安全を守るために多大なるご支援をいただいております。また子どもたちの豊かな心の育成の一環である読み聞かせボランティアの活動では、現PTAだけでなく卒業生の保護者の方に加え地域の方々にもご尽力いただいています。校長を始め教職員は、子どもたちが幸せになるための教育には、地域の方々のお力が欠かせないと常日頃から話しています。教職員は地域の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

人が幸せに生きる上で「感謝の気持ち」は欠かせないと思います。そして「有り難いと思えばしぜんと感謝の念を抱く」という考えは、大人にはあてはまるのかもしれませんが、経験が少ない子どもには教えていかなければわからないことだと感じています。感謝する心がなければ、「やってもらって当たり前」という利己的で傲慢な考え方をするようになります。そういう大人になれば、社会の中で、人によりよく生きることが難しくなります。「感謝の気持ち」をもたず人を大切にできない人が、人に大切にもらえることは少ないでしょう。ですから、今の自分があるのは、周囲の多くの方々の思いや願いのもと、助けられ守られているのだということを子どもたちが実感することが必要です。また、してもらったことだけ、目に見えるものだけに感謝するというのとは違います。相手の気持ちを考えたり、物事の本質を見つめたり、我が身を振り返ったりする力をつけていかなければなりません。

本当の意味での感謝の気持ちについて理解することは子どもたちにはまだ難しいことですが、感謝の気持ちについて子どもたちに伝え続けること、地域の方々や様々な人と関わる機会を増やすことで、いつか子どもたち自身が今までの自分の在り様、自分を取り巻く人との関係を真剣に見つめるときがくることを期待しています。そして本当の意味で感謝の気持ちが子どもの心にしぜんと溢れるようになったときに、子どもたちがより豊かな生き方ができるようになるということを信じ、これからも指導を続けていきたいと思っています。



第2回スクエアアステップ交流会
笹野台地域ケアプラザにご協力いただき地域の方々との交流会をもちました。